

堀部正二著

中世日本文学の書誌学的研究

臨川書店刊

堀部正二著

中世日本文学の書誌学的研究

臨川書店刊

江戸工業学院図書館
蔵書章

中世日本文學の書誌學的研究 定價 百八十圓

昭和二十三年六月一日
昭和二十三年六月五日



著者 堀部 正二

發行者 田 中 秀 吉

印刷者 京都市右京區太秦上刑部町一〇
大日本印刷株式會社京都工場
代表者 若林吉郎兵衛

發行所 株式會社 全國書房

京都市中京區御池通富小路西入
電話本局五五七四・三九三五番
振替口座京都二六三五四番

配給元 日本出版配給株式會社

序

本書は著者の前著「中古日本文學の研究」につぐ論集であつて、著者は前著出版後間もなく應召、昭和十九年九月七日、中支校石口附近で戦死せられたのであるが、世の常の遺稿集と異り、著者みづから應召前に整理、按排せられたものである。各篇いづれも雑誌「國語・國文」その他諸誌に發表せられたものながら、本書に收められるにあたり、また著者自身の添削補正が加へられてゐる。ただ書名はわれらが假に定めたものにならずない。出版の實際にあたつての雜務と校正とは主として同窓玉上琢彌君これにあたった。

著者堀部正二君の業績については今改めて説かない。類聚歌合の研究、その他の周到精緻を極めた調査考證を知るかぎりの人々は、いづれもその早世に對して悼惜の念禁じ得ぬところであるが、堀部君みづからは早くより卅二才を死期と感じ、長男正樹君に

「この子は五つで父を失ふのだナ」といふ語をもらしたと淑子夫人は述懐されてゐるが
遂にその語識をなすに至つた事を悲しむ。こゝに本書成るにあたりこれを靈前に獻じて
謹んでその冥福を祈る。

昭和廿三年春三月

澤 瀉 久 孝

目次

序 文

澤 瀉 久 孝

堤中納言兼輔集の異本とその形態……………三

曾丹集に就いての私見……………二三

大貳高遠集……………四三

千頼集について……………七一

鴨長明の歿年に關する一史料……………八六

兼好法師自撰家集攷……………九五

二條良基の連歌學書に就いての一考察……………一二

——擊蒙句法・僻連祕抄・連理祕抄——

二條良基の連歌學書「九州問答」と「連歌十様」とについて……………三五

新撰菟玖波集襟記……………一六五

本朝書籍目錄考證私記……………一八二

富士谷御杖の「後撰集燈」稿本について……………一九三

初期囃子方に關する二三の資料……………二〇四

——觀世小次郎權守相傳祕書と音曲雜說聞書など——

近衛前久・信尹父子と音曲……………二二五

——花傳書遺聞——

佐竹本三十六歌仙畫卷について……………二三五

——明月記による信實說を疑ふ——

畫僧文筌傳拾遺……………二四五

中世日本文學の書誌學的研究

堤中納言兼輔集の異本とその形態

一

特に多いといふ譯ではないが、兼輔集に於ても、全く形態を異にする異本がかなり存在してゐる。管見に及んだ傳本は大體次の四類に分類せられるやうである。

第一類、類従本系統。

群書類從^{卷第二百三十五}所收のものがそれで類本は多い。總歌數百四十六首。「我わびんかしらの」(類従本番號一二六)の歌の傍に「以下一本無之」とあり、後部を缺くものゝ存した事が判る。清輔本古今集^{前田侯爵家所藏}では、卷二「梅の花たちよるばかり」の條に「在兼輔集詞云しのひたる人のうつりかの人とかむはかりしければその女に、(略下)と註し、卷十六「足引の山べに」の歌にも「在兼輔集」とあり、それがこの系統本と合致する事を思へば、既に平安朝末期に流布してゐた事が知られる。

圖書寮藏歌仙集^{第五册}、所收本・西本願寺本等は、形態は大體これに類似してゐるが、細部に至ると歌數或は語句の點に於てかなりの異同を有してゐる。前者は總歌數百廿七首、類従本卷尾の干支歌を缺いてゐるが、類従本にない「いにしへのことかたらへば」・「命あらば云々」等の二・三首がある。此の外詞書の異同、及び

詞の位置の相異せるものが若干あり、是らは何れも類従本の誤脱を正すものとして注意すべきである。

後者は古筆の極めでは寂蓮法師の筆と傳へられる鎌倉期の古寫本である。西本願寺本三十六人集は、天文十八年證如上人に御下賜になつた當時から、後世の補寫のものが數部交つてゐたやうである。兼輔集も其の一つである。大體前者に近いが、これには甚しい脱葉錯簡が存する。第八葉から第九葉に移るまでに、約三十

七首の脱があるし、第十一葉十二葉はこの間の一部である——又第十葉の書寫が古いだけに貴ぶべく、類従本に缺歌から第十三葉の歌に至るまでも、凡そ十二首ばかりの脱葉が存してゐる。靜嘉堂文庫にはこの西本願寺本

の正確な模寫本と思はれる一冊袋綴の寫本がある。欄外には細字で詳細な考證山本明清といふを記し、本文の傍には撰集や異本類従本・藤谷本・寛永本・貫之本の校合がある。との校合がある。頭註の初めに「提要にもいへりしごとく此集本々不

から、別に異本研究を記した提要なる部分があつたのであらう。本文はとに角西本願寺本と同じ所まであるが、頭註が中斷してゐるのを見ると、尙數葉が後にあつたものと思はれる。先人の業績として注意すべきである。前者と同じく西本願寺本にも干支歌以下が無い。

西本願寺本
ひのひかりちかきあしたは……(略)
こしきふ卿すみたまひし四條の宮
にていまの式部卿はしめたまけるひ
いまのとあるは入道のなり
きみかなもみやをむかしのしかなか
らかはれるものはとしにそありける
故式部卿宮うせたまへる比いまは
とてかせまつ……(略)

西本願寺本

圖書寮歌仙集本

ひのひかり……

こしきふ卿……(中略、上に同じ。)

…入道のなり故式部卿宮うせ
たまへるころ

類従本

ひのひかり……

式部卿宮うせさせ給へるころ

今はとて

今はとて

右の三段は一首の缺脱の過程を示して面白い。

第二類、歌仙家集本系統。

正保四年中野道也刊行の歌仙家集所收本である。百四十首の外に他本歌これは後人が類従本系のものによつて、歌仙家集本に見えぬ歌を巻初より順に拾つたものである。他人歌のあるものは省いてある。誤つて重出せるもありとして廿首がある。内、重出歌は七首一首は他本（歌中にあり）である。續國歌大觀・國歌大系等によつて流布してゐる。何れも私意を以て諸系統本を参照混入してゐる。静嘉堂藏三十六人集鳥丸光廣自筆本。本を初め、此の系統の寫本は極めて多い。此の系統本は凡て干支歌を含んで居り、且、類従本の廿四首を缺く代りに、それに無い十五首がある。

此の系統の異本と目すべきものに近衛家藏三十六人集京大圖書館寄託本・圖書寮藏本、（五〇一・一四五）等がある。前者

は刊本の十首内、二首は他本（歌中のもの也）を缺く代りに、それに無い二首を有する。語句的にも出入が多いが、本文は刊本より遙に分り易い。重出歌は僅か一、二しかない。これは後人が手を加へたのである。また「人はかる心のうち」の詞書の如く、刊本意味不通なれば後撰集本文により訂正し、且「たかために」の返歌を補つた如き點のあるのは注意を要す。「或本歌」のあとに「乍入撰集不見家集哥追私書之」として十三首があり、次に中納言兼輔の傳が附されてゐる。この勘物は全體公卿補任によれるものゝ如く、まゝ三十六人歌仙傳・古今集目錄等に一致する場合もある。

後者は大和綴の古寫本で、大體刊本に同じであるが、總歌數に於て十三首多い。「乍入撰集云々」の歌はないが、前者と同じく卷末に勘物がある。刊本より古い形態と思はれる。京大研究室藏歌仙家集本も全くこれと同一であるが、本文の部分だけである。

第三類、貫之本系統。

兼輔集の異本の中で最も特異の形態を備へてゐるのは、貫之筆と傳へられるそれである。貫之筆といふのは信

高野切第二類に類した筆であり、平安朝末期の書寫である事は疑ひないであらう。春・夏・秋・冬・戀の部のみ。今日完本は存しないが、元祿の摺本戀の部のみ。、安田家藏の原本斷簡春・夏・秋・冬・戀の部のみ。、哀傷の部の、其の他古筆切の一・二葉によつて百四首を知り得るに過ぎぬ。内、十七首は歌仙本・類從本の何れにも見えぬものである。摺本には奥に

堤中納言集

右筆者覺見難推知茲高野山文珠院類筆所持也禰明院其奥加等毫爲貫之墨痕云々定存由來歟尤任先達之所爲此本亦可脩國珍者乎

寛永第七臘月吉辰

持進藤花押

右之奥書在之以卷物不違一字令書寫之訖尤以可謂證本乎

元祿第五龍集壬申臘月中旬

政房花押

の識語がある。

墨付廿一枚八行袋綴。出版年月書肆は不明であるが、「元祿第八歲次乙亥孟春布沙星日」の刊記を有する標註會丹集の卷末に、「萬笈堂英選藏板目錄和書部」の廣告があつて、その中に「貫之眞蹟本堤中納言家集石摺一帖貫之書」とあるから、恐らく、元祿五年後まもなく、同八年に至るまでに萬笈堂から版行されたものであらう。

安田家秘藏の一卷去る昭和十年二月廿日國寶に指定された。は卷子本に装幀してあるが、複製本單獨で複製されたものに、(イ)卷子本野切と共に一卷に複製されたものとある。今いふは單獨本(イ)である。の卷末の尾上博士の識語によると、此の「一まきは安田家なるふたまきをあはせたる云々」ものであるさうであるが、恐らく雜・哀傷と一卷づゝ分れてゐたのであらう。もとは冊子帖になつてゐたやうである。雜部の一葉は徳川義親公爵家にも存する。

其の他前記摺本の寫本が多和文庫にある。(集古清坊・香木舍文庫の藏印があるから、田中大秀の舊藏本である。朱筆の勘物が多く加へられてをり、本文は版本の錯簡を知らずに寫したと

思へる所がある。一ヶ所版本の本文と一致せぬ所があるのは不審である。戀部の後に、二行空白の後浦の一首がある。本の軸物かどうか、一應興味のひかれる記事である。

第四類、圖書寮藏本、(五〇一、七七一)

大和綴古寫本。「中納言兼輔集」と題してあるから、第二類圖書寮本と區別する爲、以下單に「中納言本」と呼ぶ事にする。

これは前述の諸本とは全く異なる形態のもので、總歌數百二首、内七首は他のいかなる系統の兼輔集にも見えないものである。他に類本を覓めて未だ探し得ないで居る。

以上の四類の外、所屬の明確でないものに傳公任筆兼輔集切がある。これはたゞ斷片を残すのみで、全貌を知る事は不可能であるが、もとは銀砂子を撒いた鳥の子の胡蝶綴四半切の冊子本であつた由である。筆者は藤原定信といふのが認められてゐるが、然らば大體平安朝後期の傳本の面影を示すものとして尙ばねばならぬ。

二

以上の諸系統本の考察を述べるにあつて、先づ類従本・歌仙本より説き初めるのが當然であるが、この兩者にあつては極めて複雑した問題が存し、且、本稿の要點でもあるから、こゝでは便宜、貫之本・中納言本より考察を初める。從つて圖らずも敘述の混亂を來すやうな事があるかも知れぬが、この點は自分も注意してゆく積りである。

貫之本の形式は大體撰集に倣つて四季・戀・雜・哀傷等の各部に分たれ、其の各々にあつては初めに「元日三月盡梅柳櫻款冬藤歸鴈」(以上春部の例也)の如く標目があり、次に標目の歌一首乃至十數首を擧げてゐる。この標目が必しも内容と一致せぬ場合が存する。たとへば、摺本秋部に「雁」の歌があるが、これは標目に見えぬものである。安田家本にあつて殊に甚しいのも、脱葉の爲とばかりは言へないやうである。筆者の手になる所謂名家歌集切——公忠・是則・千里・興風・深養父等の家集の斷片——が、何れも同じ組織をもつを見れば、これが何人か後人の營爲になる事は明かである。恐らく平安朝中期或は末期の或時期に、何人か筆者即分類者であつたかもしれぬ。歌合等の用に供すべく、和歌の節用めいた分類を企てたものと思へる。従つて兼輔集の原始的形態でない事は明かで、唯、分類に使用した親本がいかなる形態の本であつたかゞ問題となるのである。

この貫之本の本文を他系統のそれに比較してみるに、詳細の點に於ては多少の疑問もあるが、その配列や本文の上から、類従本・歌仙本などゝ全然別根のものとは言ひ得ないやうである。たとへば貫之本に於いて「あふことをこよひく」と戀部の歌の詞書が、「かへりことなりけり」となつてゐて唐突奇異の感がするが、類従本歌仙本も同じけりでは、この歌の前に「くちなしの色好み」の歌があり、その後序に、

是は井手といふみかはやうどに山吹の花をもたせて色めける人のおこせたりける返事なり

とある。「あふ事」の歌は、中納言本では「ことばなきうた」の一群中にあり、類従本にあつても詞なく、前歌の後序と直接に接して續いてゐるのである。是に於て、貫之本の依據した親本が類従本の如き配列のものであつた爲、「かへりことなりけり」は前歌の後序の末尾を詞と誤つたものであらうと想像される。貫之本では「くちなしの」の歌、類従本等と同意の詞書を持つて、全然別ヶ所に存する。

更に哀傷部にある

とふことになくさのはまのなくさまはそてのひるまはわれもしりなむ

の歌は、

とふ毎になくさの濱のなくさまは波のよるひるあらじと思ふ

白波のよるくごになくさまば神のひるまは我もしりなむ

の二首を混亂したものであるが、類従本にあつては此の二首が相接して出てゐるから、恐らく貫之本の親本に於てもさうであつた爲であらうと思はれる。

更に、貫之本と類従本との關係は、その分類意識に於ても見られるもので、貫之本の分類組織は、後述する類従本の分類の更に展開し一層明確な姿を取つたものとも考へられるのである。

其の外、貫之本には、明かに古今・後撰等の撰集によつたと思はれるものもあり、例へば「ふるさとの三笠の山」のりてまたのとしのりゆみのかへたちのあるしにまかりてあそひするをきゝてかれこ中納言本とのみ一致するものもあつれおもひをふるついでに」とあるのは、殆ど後撰集の詞に一致する。例は多い。中納言本とのみ一致するものもあつて、その分類編纂の際に、嚴密に親本のみによらず、他書を參照したと思へる點もないではないが、とに角、平安朝における兼輔集の本文の端が窺はれる事を多とせねばならぬ。

中納言本も決して自撰のものでない事は「ことはなきうた」の一項があるので明かである。歌の配列は極めて雜然たるものであるが、部分的には類従本・歌仙本等と一致する所多く、それらとの關係が思はれる。中納言本に

あめのふる日みのむしつきたえたにふみをつけておこせたるひとに

はるさめのふるにぬれたるみのむしのつけるえたをはたれかおりつる

の歌があるが、この歌の詞は類従本に「みのむしつける枝につけておこせたる返事に」とのみで「あめのふる日」の句が無いが、西本願寺本・貫之本徳川侯所藏・斷簡の部分、歌仙本何れも類従本と大同で、原本にもさうであつたと思はれる。この歌は類従本も同じに於て、「雨ふる日」の詞書をもつ「庭たづみ木の本ごとに」の歌に續いてゐるのであつて、中納言本の右の詞書のこの兩首の詞の合成されたものらしい事中納言本に於て「庭たづみ」の歌が「ことばなきうた」の中に收められてゐるのは、「はるさめの」の歌に詞を奪はれたためと思はれる。は、その親本が類従本の如き形態のものでなかつたかと思はせるに十分である。歌仙本では兩首が離れて存在してゐる上に、「庭たづみ」には、「春雨のふる日濁れる水に花のちりかゝりたるに」の如き長い詞をもつてゐるから、これではない。

其の他、配列の他系統本に合致する箇所十數個の場合に就いて考へるに、大體類従本によれるものゝやうであるが歌仙本が正形を維持してゐると思はれるやうな所後述する如く、私は現存歌仙本の形態を、類従本の原形から派生したものとして考へてゐるのである。ではそれに一致してゐる。以て、後述する類従本の原形態に依據したと思はれる。詞書に特異なものが多いのは、古い時代に派生した私家集の異本に通有の事で、後人の自由な手が加はつてゐるのである。詞書が古今・後撰・六帖・大和物語等と密接な關係にあるのも、むしろそれらによつて家集の本文を改變したのである。この中納言本が、いかなる經路で原類従本から派生したかの過程は自分には未詳である。

以上の二系統本は兼輔集本然の形態を傳へるものではないが、尙且、類従本・歌仙本の誤を訂し、今中納言本の例を挙げると、「足引の山のかけはしふみのほり」の歌は、類従本・歌仙本には「幽仙法師がとし久しく御導師つかうまつりて御佛名のあしたに律師になりけるを見て」と詞書あるが、中納言本には御導師雲暗に關する話（同意なれど表現大異）となつてゐる。西本